

◎年間総括・保護者アンケート・職員の自己評価・第三者委員との話し合いをもとに、保育園の全体的な計画に沿って園評価を行う。

年間通して様々な感染症が見られていたため、園内の状況やサーベイランスでの情報を共有できるよう掲示して知らせてきた。対応としては、感染症の流行に伴い子どもの手拭きタオルの使用をやめペーパータオルに切り替えたり、清掃や消毒の徹底、感染症や嘔吐処理の仕方についての園内研修等を行ってきた。今年もインフルエンザと胃腸炎（ノロウイルス）は罹患児が多かった。ヒトメタニューモウイルスにより入院した児もいた。感染症対策について保護者アンケートの中で「もう少し環境衛生に気をつけてほしい」という意見が寄せられていたので気をつけていく。新型コロナウイルスについては県や市の対応をもとに登園自粛のお願いや行事・保育活動の中止・変更をしてきた。

ヒヤリハットや保育中の事故については、毎週の事故発生防止のための委員会において共有してきた。その都度速やかに報告し全体周知できるようになってきている。今年度、受診した事故は5件だった。（テラス・遊具から落下し打撲、転倒し切傷、肘内障）

今年は、“子どもにとっても大人にとっても一人一人を大事にする保育”が大事と改めて実感した一年だった。職員集会での学びが活かされ“あ～楽しかった”が子どもだけでなく大人にも広がった保育がされていたように感じる。夏祭り、運動会、ひなまつり会では、天気や感染症の事態にドキドキハラハラしたが、子どもたちはいきいきと、いつもと変わらず楽しみながら頑張る姿が見られた。子どもたちの姿や成長に改めて子どもの力を感じさせられたと同時に、様々なピンチをみんなで乗り越え保育を頑張ってきた職員の力と成果を実感した。

ひなまつり会では、緊張や不安があっても保育者や友だちの励ましで気持ちを立て直して舞台に立つことができたり、友だちや保育者と一緒にいつものようにのびのびと遊ぶ姿には安心感も感じられた。また、5才児は26人全員揃うことができ“みんなで頑張ろう”という気持ちが発表の一つ一つに表れていた。各行事で子どもたちが安心して遊んだり力を発揮してくれたのは、クラスや園全体の空気感が保育に表れていたからだと思う。

“子どものどんな思いに寄り添うか、この子にとって・クラスみんなにとつての達成感や満足感は？”と考える中では葛藤もみられた。楽しい保育をしたいのに保育を楽しめなかったり、子どもへの手立てや保護者支援に悩んだり、時には職員間でのぶつかり合いもあつたりした。子どもたちがいきいきと過ごせた一方で、安心して気持ちよく保育できず悩み苦しむ仲間や休職する仲間がいたことは本当に胸が痛いことだった。職員集会での学びをもとに“補い合える関係”ということを意識する職員も多かつたし職員会議でもみんなで話し合ってきたが、職員の連携や信頼関係づくりにおいては反省と課題が見えた。職員の悩みや園への苦情等みんなでその都度話し合い、自分のこととして捉えながら考えたり、互いの思いを出し合ったりしてくる中で、職員一人一人の意識も変化してきたように感じる。継続課題ではあるが、一人一人はもちろんのこと、職員集団としても高まり合っていけるよう努めていきたい。

保護者支援では、行政との連携も含め支援が難しいケースもあり対応には苦慮した。また、子どもの見方や手立てについてなかなか共通理解が得られず悩んだこともあつたが、多くの保護者が保育園に通いながら子どもと一緒に育っていくことを思えば、保育と同じですぐに結果が出るものではないことを念頭に置きながら子育ても親育ちも長い目で関わっていきたい。家庭との連携についてはほとんどの保護者が日々の関わりの中で園に対して信頼を寄せてくれていることがアンケートから見えた。しかし保育者の言葉遣いや子どもへの対応で気になる姿があつたことも意見として寄せられた。保護者の思いを丁寧に聴き、真摯に受け止めながら、保育園は公の場である自覚を持ち、保育士として適切な言動かどうかを一人一人が振り返り考えて行動していく。

子育て支援事業や病後児保育事業は、市子育て支援課や市内の各施設と連携を図りながら保護者のニーズに応えられるよう努めてきた中で地域に根付いてきているのを感じる。病後児保育は年間延べ247件の利用があつた。

キャリアアップ研修をはじめ各種研修会へは積極的に参加して来たり、共立福祉会研修委員会での研修や実習交流にも大勢参加し、みんなで学び合ってきた。また、実習生を受け入れる中で改めて保育を学び直すこともできた。今後も職員全体で保育内容や質の向上に努めていく。